

歴史と向き合う一負の遺産の視覚化と技術革新

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2019-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加須屋, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000254

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



歴史と向き合う – 負の遺産の視覚化と技術革新

Confronting History: Bitter Legacy and Technological Innovation

Akiko Kasuya 加須屋明子

歴史に刻まれる負の遺産、例えば戦争や災害など、人類の悲劇と関わる場所は、それを巡って様々な議論を呼び起こし、また現代の社会に対する鋭い問題提起を行い続けている。芸術家たちもまた、そうした場所との関わりから作品を制作し、教訓や記憶を次世代へ伝える役割の一端を担うことができる。とりわけ近年は、様々な先端技術が比較的容易に取り入れられるようになっていたため、表現の幅が広がって多様な素材によりこれまでにない表現方法で、問題提起が行われ、人々の記憶に深く刻まれるケースが増えた。

例えば、1958年オトフォック（ポーランド）生まれのミロスワフ・パウカは、ポーランドという苦難に満ちた歴史を経験した国の記憶をテーマとした数々の作品を発表し、国際的に高く評価される作家であるが、かつて1997年に、ストックホルムにてエストニア号追悼記念という屋外のプロジェクトを手がけたことがある（図1）。ストックホルム湾にのぞむ墓地の手前、ヴァーサ号博物館という建物の裏手にその屋外作品がある。1994年9月28日、タリンからストックホルムへと航海中のエストニア号が悪天候にあって沈没し、バルト海で852名の人命が失われるという大惨事が引き起こされた。この犠牲者達を追悼するために、パウカのプロジェクトが開始される。彼の提案した概念は、閉ざされていることに対する開かれていること、冷たさに対する暖かさ、暗さに対する明るさ、という3点であった。

彼はストックホルムにある船乗りたちのための墓地の壁の海側を開き、そこに新たな壁、壁というよりも開かれたコンクリートの通路を作ってその一面に犠牲者の名前を彫りつけた。中央には木を植え、木の根本には事故の起こった地点の緯度と経度を刻んだ鉄の輪をはめる。この輪は一種の結婚指輪のようなものであり、この木に

よって、木の根によって、人々が亡くなった場所である海とこの追悼記念の場所とが結びつけられている。



図1 ミロスワフ・パウカ《エストニア号追悼記念》1997年（ストックホルム）©Mirosław Balka

海の見える日当たりの良いその場所を選んだのは、犠牲者達の眠る海を常に臨むことができるようにと考えてのことであった。樹木の根から吸い上げられる水脈を通じて、冷たい海の底の犠牲者たちの声を私たちは聞くことが出来る。パウカが「私たちの手に触れるものは全て、過去からやってきたものであり、それは私たちの死への接近でもあります。」¹と述べるように、ここで彼は死へと通じる通路を制作したのだ。冷たい水の深い底の音へとつながる、37度という人間の体温と同じ温度に暖められるべき、暖かな通路。それはいわば私たちの文化、生きている世界から、死を根底に孕んだ世界、自然へと向けられた回路であり、また逆に死から生へと導かれる道筋でもある。

2009年からポーランドの古都クラクフで開始されたArtBoomという都市型国際芸術祭では、パウカは

《AUSCHWITZWIELICZKA》を発表した(図2)。これはクラクフのある旅行会社が企画した観光プランのチラシ「アウシュヴィッツとヴィエリチカを8時間で巡り、忘れがたい経験と楽しいエンターテイメントを」というテキストに着想を得て提案された、長さ17m、幅2.5m、高さ3mのコンクリートの通路である。天井にはAUSCHWITZWIELICZKAという文字の形に穴が開いて、そこから差し込む光が通路に影を落とし、文字となって浮き上がる。天候や時間帯によって、文字の影は変化する。

クラクフは第二次世界大戦でも破壊されなかったため、中世の町並みの残る美しい街で、観光客の人数も年々飛躍的に増加している。クラクフ近郊の観光地として名高いヴィエリチカ塩坑も、近年人気が高まっている。一方、アウシュヴィッツ=ビルケナウ絶滅収容所跡は、第二次世界大戦時にナチス・ドイツが作り、そこでさまざまな大虐殺が行われていた現場である。跡地には博物館がつくられ、日本語を含む各国語のガイドによるツアーも一日に何度も行われ、恐ろしく狂気に満ちた犯罪を繰り返さないためにも記憶を語り継ぐ努力が続けられてきた。アウシュヴィッツを訪れることは、「忘れがたい経験と楽しいエンターテイメント」と形容され広く広告されることと相いれないようであり、資本主義においてはこうした態度も容認され、たちまちのうちに広まってしまった。

容認する以上に、このような観光客誘致を積極的に推進しているのはクラクフ市かもしれない。バウカは強いメッセージ性を帯びたこの作品をあえてクラクフでの芸術祭に提案し、観光に含まれている両義的な側面(それはいわゆる「ダークツーリズム」について語る場合に議論の焦点となり得る要素でもある)を明らかにしてみせた。

本作品はクラクフ、ポドグジェ地区にある独立広場に1年近く設置されていたものの、バウカのメッセージはなかなか伝わりづらかった様子で(ちなみにアウシュヴィッツはドイツ人がつけた呼び名であり、本来ポーランド語ではオシフィエンチムと表記する)、酔っ払いがたむろしたり落書きがされたりして、地域住民からも抗議の声が上がった。一旦撤去され、落書きも消された後、改めて2010年にクラクフ現代美術館²建設予定地の近くに、最寄りのザブウォチェ駅と美術館をつなぐ場所に再設置されることとなった。ただしこれに対しても反対の声が上がる³。主に治安上の問題より、作品保全に関して懸念の声が上がった。⁴

1943年4月16日、第二次世界大戦の最中、ワルシャワゲットー蜂起直前にゲットーの中で誕生したクシシュト



図2 ミロスワフ・バウカ《AUSCHWITZWIELICZKA》2010 ©Miroslaw Baka

フ・ヴォディチコは、現在はニューヨーク在住でアメリカのメディアアーティストとして著名であるが、戦時下のポーランドで生まれ、凄惨を極める状況下でどうにか生き延びたものの、戦後の混乱と荒廃の中で幼少期を過ごしたという体験は、成人して後の制作と深く関わっている。彼は1998年にヒロシマ賞を受賞して来日し、太田川のほとり、原爆ドームの下でパブリック・プロジェクトを行った(図3)。その際にヴォディチコが目にしたのは、いわゆるステレオタイプな戦争の悲惨さと原爆の被害をえがくというよりもむしろ、そうした大まかなくくりからこぼれ落ちがちで、個々の物語であり、身近な暮らしを営む人々の中に引き継がれ残り続けている原爆、そして戦争というものの記憶であった。

広島でヴォディチコがインタビューしたのは、在日韓国人や2世、3世など、幅広い年齢層の老若男女で、すでに原爆の後遺症は残っていないのではと思われる人々の間にも、世代を越えて残り続ける傷が引き継がれている様子が彼らの口から語られ、録音されて、彼らの手の動きと共に投影され、まるで原爆ドームが命を得て語りだすようで、記念碑が擬人化された。

ヴォディチコは近年、戦争廃絶のために力を尽くしており、その具体的なアクションの一つとして、戦争廃絶インスティテュートをパリの凱旋門を囲む形で建設する提案を行い、その模型や具体的なプランを提示し議論してきた。ヴォディチコによれば、世界は戦争文化で満たされており、至る場所で争いが想起させられる。凱旋門はその最たるものであり、戦勝記念として重要な、権力を誇示する象徴的な建築物であるからこそ、それを囲むようにして戦争廃絶のための機関を建設し、世界から英知を集めて(平和学、社会学、哲学者、法学者、科学者など各分野の専門家の知恵を集結する)戦争をなくすための方策を考え、また戦争によって傷を負った人々を治



図3 クシシュトフ・ヴォディチコ《ヒロシマ・プロジェクション》1999年（広島） ©Krzysztof Wodiczko

癒する場所として機能させようと提案した⁵。

ワルシャワ（ポーランド）でも、無名戦士の墓（かつてポーランド陸軍省だったサスキ宮殿の遺構）があるピウスツキ広場に、ヴォディチコは「文化の武装解除と戦争廃絶のためのユゼフ・ロートブラット・インスティテュート」建設を作家のヤロスワフ・コザキエヴィチと共に提案した⁶。広場の名前の由来でもあるユゼフ・ピウスツキ将軍はポーランドを独立に導いた人物として讃えられるポーランドの国民的英雄である。無名戦士の墓は今も昼夜を問わず衛兵が守る重要な場所で、そうした戦いの記憶と強く結びついた場所のために本計画は構想された。2016年にピウスツキ広場横のザヘンタ国立ギャラリーで発表されたこの計画では、ロシア支配下のポーランドに生まれ、パグウォッシュ会議⁷の会長をつとめるなど平和活動に貢献し、ノーベル平和賞を受賞した物理学者、ユゼフ・ロートブラット（1908-2005）の名前を冠した施設の建設が提唱された。ロートブラットは第二次世界大戦勃発時、研究のためパリに滞在していたため祖国に戻ることができなくなり、またワルシャワに残した妻は強制収容所でホロコーストの犠牲となってしまう。後にイギリス国籍も取得してポーランドとの二重国籍であった。

本インスティテュートも、紛争や戦争、平和などの歴史を語り合い、議論できる場所として機能するように計画されており、平和の構築のために文化や芸術、教育における様々なプランの提案が促進される。戦争と平和をテーマとした芸術作品の発表スペースも準備され、会議の場としても機能する。世界のインタラクティブなマルチメディア地図が武力紛争の監視と視覚化を行うよう意

図されており、現在行われている調停や交渉により解決されたものもリアルタイムで表示される。映像プロジェクションのための部屋やアーカイブの閲覧できる図書室、公演やワークショップ向けの部屋も準備される。文化の武装解除と戦争廃絶を目指し、世界各国から諸分野の専門家を招き、また過去の知識を生かして未来を考えるための重要な機関となる。文化、教育、哲学、法律など多様な分野の研究者や実践者らが集まって、武力紛争の予防と撲滅のための行動を起こすことが目指される。



図4 クシシュトフ・ヴォディチコ+ヤロスワフ・コザキエヴィチ「文化の武装解除と戦争廃絶のためのユゼフ・ロートブラット・インスティテュート」完成予想図 2016年 ©Krzysztof Wodiczko

ヴォディチコのこうした提案については、テキスト、図面、完成予想図（図4）、CGや模型作成によって示されたが、凱旋門や無名戦士の墓といった、戦争の記憶や愛国心と強く結びついた場所をあえて選び、そこを戦争廃絶のためのセンターにするというプランを提示することで、場所と結びつく記憶の刷新、その無化を図っているようにも感じられる。想像力を駆使し、それぞれの血塗られた歴史が平和の実現のための場所として生まれ変わるとイメージしてみることは、時に困難であるかもしれない。かつて、来日時には靖国神社を戦争廃絶のためのセンター設立候補地として提案したこともあった。議論の焦点となることの多い場所を平和のための施設とする提案は名案である一方で、賛否両論も予想された⁸。冷静な判断を下すことが困難であるような、様々な強い感情の渦巻く場所をあえて取り上げ、その意味を変更しようとする提案は、短期的な達成は困難であるかもしれないが、人類が長い時間をかけて生み出している、いわゆる戦争文化というものに対抗し、時間をかけて崩して変容させてゆくための大きな一歩ではあるだろう。

ポーランド生まれの二人の作家たち、パウカとヴォディチコの制作を例に、芸術家による負の歴史の視覚化や記憶の伝達について検討してきた。文化を継承し、歴史の教訓から学ぶためにも記憶の伝達は重要である一方で、過去の凄惨さと向き合うことは、時に非常な困難や苦痛を伴うものであることも多い。芸術家たちは様々な形で、最新の技術も駆使しながら、いわゆる負の遺産を

も別の形へと変容しながら未来へとつなげようとする。過熱する観光化の波に、ともすれば歴史は新たな装いと共に流されてしまいがちになるのだが、そこであえて踏みとどまる、こうした試みが継続され蓄積されてゆくことに一縷の望みを託したい。

*本研究は平成30年度科学研究費（挑戦的研究（萌芽）18K18441）の助成を受けたものである。

註

- 1 ミロスワフ・パウカ「作者と語る」講演会 2000.7.29（土）国立国際美術館地階講堂
- 2 第二次世界大戦中、多くのユダヤ人労働者を雇ったことで命を救ったオスカー・シンドラの珉瑯工場跡を再利用して作られた。2011年5月開館
- 3 cf. Magdalena Ujma, *Auschwitzwieliczka* Mirosława Bałki: kontrowersje wokół sztuki w przestrzeni publicznej, o.pl. 2011-2-22, <http://magazyn.o.pl/2011/auschwitzwieliczka-miroslaw-balka-kontrowersje/#/> 2018年11月27日最終アクセス
- 4 修復のためか、近年また撤去されており、2018年9月の段階でもまだ戻されていない。公共空間での設置に関して、同

様に強く議論的となった作品に、ユリタ・ヴォイチクの《虹》がある。これは2011年ブリュッセルのEU本部前に設置され、愛や平和、希望の象徴としての可憐な作品であったはずが、ブリュッセルから2012年にワルシャワ市内に移管され、教会前の救世主広場に設置されるとたちまち、虹をLGBT擁護のシンボルとみなす狂信的なカトリック教徒などからの強い批判を浴び、放火されるなど何度も破損し、その都度強い素材で作り直さざるを得なくなり、また24時間警護がつくなど物々しく、政治的な論争に巻き込まれてしまい、2015年に撤去される。

- 5 cf. Krzysztof Wodiczko, *The Abolition of War*, Black Dog Publishing, 2012.
- 6 *Krzysztof Wodiczko and Jarosław Kozakiewicz Disarming Culture. Jozef Rotblat Institute for Disarmament of Culture and Abolition of War Project*, 06. 10 – 27. 11. 2016, Zachęta National Gallery of Art, Warsaw, Poland.
- 7 全ての核兵器及び全ての戦争廃絶を呼びかける科学者の国際会議
- 8 2010年3月23日、「マイ・フェイバリット」展（京都国立近代美術館）オープニング時の対話より。この後、計画の提案に向けてのリサーチも開始されたが、2011年3月11日の東日本大震災並びに福島第一原発事故により、日本社会の向き合うべき場所の選定についての見直しが必要との考えから変更され、現在も引き続き検討中である。